「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS
https:www.jrc.or.jp
令和3年6月1日(毎月1日発行)　赤十字新聞　第973号　昭和24年9月30日 第三種郵便物認可
June 2021　No.973
6

わたしも赤十字　寄付の協力者　豊田風佑（とよた・ふうすけ）さん【P.4でご紹介】

特集

大学の体育会を巻き込んで“集団献血”を成功させた、二十歳の挑戦！

献血は「命を救う」ボランティア

赤十字の最新情報を、SNSでチェック!

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

赤十字新聞　編集･発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL : 03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

第973号(昭和24年9月30日 第三種郵便物認可) 令和3年6月1日(毎月1日発行) NO.973 June 2021 赤十字NEWS 3

都内の学校内献血が次々と中止になる中、大学の体育会を巻き込んで“集団 献血”を成功させた、二十歳の挑戦！

学生たちが大学にアピールした「献血のメリット」
（体育団体連合会作成の企画書より抜粋）

- ☑アスリート集団である体育会が率先して献血を実施することで在学生全体の献血への抵抗感を減らし、社会問題に対する認識を喚起する。
- ☑コロナ禍で活動が制限される中、体育会所属の学生に社会貢献の場を提供し、共に取り組むことで団体間のつながりを強化する。
- ☑献血後は血液成分のデータを得ることができ、アスリートとして体調管理とパフォーマンスの向上に役立てられる。（著名なオリンピック選手も取り入れた手法）

献血は「命を救う」ボランティア

（上写真）昨年12月の池袋駅前献血に協力した上智大学サッカー部メンバー。前列右から３人目に長南さん（下写真）４月、上智大学で献血する長南さん

４月中旬、東京都内に３回目の緊急事態宣言が発令される直前に上智大学で学内献血が実施され、２日間で108人の学生・大学職員が協力しました。これを発案し、実現のために奔走したのは上智大学３年生の長南航太さん。所属するサッカー部だけでなく、大学の体育会全体のボランティア活動として集団献血を成功させた、長南さんとその仲間、サポートした人々に、献血実現までの活動や思いを振り返っていただきました。

上智大学３年生 サッカー部 長南航太（ちょうなんこうた）さん

昨年の春、サッカー部の中で、ボランティアを企画する係になりました。しかし、新学期が始まった途端の緊急事態宣言。当時は未知のウイルスとして恐れられ、感染を防ぐために授業も部活もすべてオンラインという状況。そんな中、夏になってコロナ禍で献血が激減しているというニュースがTwitterで回ってきました。これだ、と閃（ひらめ）き、仲間に集団献血を提案しました。僕が最初に献血をしたのは高校１年生の時です。お菓子やジュースがもらえて授業が休めるから、という不純な動機で(笑)。でも、献血が終わった後に手にしたパンフレットの言葉にハッとさせられたのです。“あなたの献血で、一人の命が救われます”。こんなに明快なボランティア活動が他にあるでしょうか。自分の血液で、誰かを救える…この実感を、サッカー部の仲間にも味わってほしい。そして、運動部の自分たちが率先して献血することは同じ大学の生徒たちにインパクトを与えるはずだから、なんとか学校内で集団献血を実現したい、と考えました。そこで日赤の献血の窓口に相談したのですが…今は大学構内での実施は難しい状況だからと、希望はかないませんでした。諦めきれずにいたところ、今度は日赤から連絡をいただき、池袋の駅前でバス献血に協力することに。当日参加できたのは10人。献血未経験者もいました。仲間と献血してみて強く感じたのは、やっぱり大学で献血したい、ということ。そのことを周りに話すうちに、サッカー部を超えて体育団体連合会(以下、体育会)全体で取り組もうという話になって。大学の学生センターにもサポートをしてもらい、日赤とも相談し、大学に企画書を提出。

感染予防のため間隔をあけて献血の順番を待つ上智大学の学生たち

もともと体育会自体が独自に体調管理・報告の仕組みを持っていることから、その活用による感染予防の有効性と大学で集団献血を行う意義が認められ、学内献血が実現しました。この献血会では108人の協力がありましたが、これは体育会の学生だけ。ここから大学全体、そして広く社会に、人を救えるボランティア「献血」を広めていくのが目標です。

僕が人を救う活動に使命感を抱くのは、東日本大震災で経験したことも関係があるかもしれません。宮城県の海沿いの街で生まれ育った僕は、3.11の地震・津波発生後、母や兄と近くの小学校に避難しました。２階建ての小さな校舎で、約600人の避難住民が屋上に逃げましたが、近くの工場で大規模火災が発生し、屋上にいると炎に焼かれそうな状況に。真夜中の屋上で、津波と炎に取り囲まれた、この世のものとは思えない光景を目の当たりにしました。人々は炎から逃れるために水が引きつつある２階に下りましたが、いつまた水位が上がってくるか分かりません。恐怖とパニックで泣き叫ぶ声が響く中、一晩中、声を張り上げて皆を励まし続けた男性がいたのです。「大丈夫だ、ぜったいに助かる！」その力強い、生きることを諦めない声に、どれだけ救われたことか。僕はまだ10歳でしたが、救い合って生きることの素晴らしさをそこで経験したと思います。こんな被災経験は誰もがすることではありませんが、人を救いたいという気持ちは、人の心に自然と湧いてくる感情じゃないでしょうか。だから、もっと多くの人に、献血で人を救える素晴らしさを知ってもらえるように、活動を続けたいと思っています。

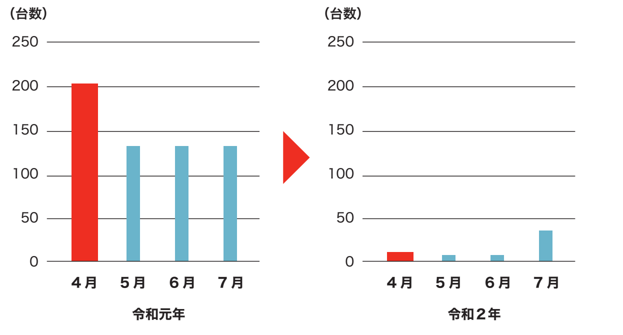
東日本大震災で約600人が屋上に避難して助かった仙台市立中野小学校 写真：毎日新聞社 / アフロ

●コロナ禍で団体献血が激減

昨年の２月以降、新型コロナの蔓延（まんえん）による緊急事態宣言の発令などを受け、団体献血の中止や延期が全国で相次ぎました。また、現在もテレワークや休校などの影響もあり、以前と比較して協力が得にくい状況が続いています。特に、高校、大学などでの献血は大幅に減少しており、コロナ禍前の令和元年４月には関東の１都９県で約200台もの献血バスを配車していましたが、昨年はわずかに９台。最近は徐々に回復傾向にありますが、学校で献血を実施するハードルは以前よりもかなり高くなっています。そのため、令和２年度の10代の献血者数は目標に対して２万５千人も少ない結果となっています。

献血は『不要不急』に当たりません。病気やケガで、血液を必要とする方々のために供給を止めることはできません。日赤はコロナ禍の前から安心安全な献血を追求してきました。そして、これからも感染予防対策を徹底してまいります。ぜひ、皆様のご協力をお願いいたします。

高校・大学など、学校への献血バス配車台数（１都９県・令和元年～２年の実績）



上智大学３年生 サッカー部 松井健豪（まついけんご）さん

大学内で呼び掛けを行う松井さん（左）と、長南さん

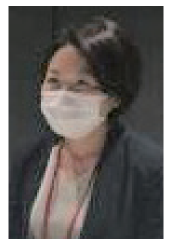
サッカー部のボランティア活動として長南が献血を提案した時、僕はなんの疑問も抱かずに賛同しました。僕自身は献血をしたことはありませんでしたが、父がよく献血をし「今日、献血してきた」という会話を家族で交わしていたので。しかし、仲間に協力を呼び掛けてみて驚きました。献血が怖い、と渋る人の多いこと！ そこで気づいたんです。献血を身近に感じていると献血に抵抗はない。知らないから抵抗があるんだ、と。つまり、「友達がたくさん献血をしている、当たり前のように献血がそばにある」この認識が同じ世代で広がっていけばいい。今はそれが１つの目標です。こういう活動していると、週6日で部活があるのに献血を含めてボランティアするのは大変なんじゃない？と聞かれますが、大変さよりも、「その活動をやりたい」があるから、やるんです。長南も部活と勉強の合間に打ち合わせをしたり企画書を作ったり、学内での献血実施に向けて忙しそうでしたが、「大変そう」ではなかった。大学で献血できる、みんなに献血を知ってもらえる、そのことを彼は楽しんでいたし、僕たちも同じ気持ちでした。

上智大学 学生局 学生センター 高村健一郎（たかむらけんいちろう）さん

自分の献血前に、職員に説明を受ける高村さん（左）

本学の運動系クラブで構成される体育団体連合会(以下、体育会)から「春学期に課外活動として学内献血を実施したい」という相談を、昨年の冬に受けました。それに対して当初は、対面授業が再開して間もない時期であるため、4月は授業の実施を優先したいこと、日赤側の負担を軽減するために学外の献血会場で協力することの 2点を提案しました。しかし、学生側は「学内で実施し、同年代の在校生全体に献血をアピールすることに意義がある」とあきらめません。個人的な思いですが、大学時代に新聞奨学生だった私は、朝晩の新聞配達や営業の仕事があったため、部活やサークルなどの課外活動に参加することができませんでした。それゆえに、大学職員として学生の課外活動を精いっぱい応援したいと日々考えており、彼らの熱意を尊重し、協力することにしました。コロナ禍であらゆる課外活動が制限される中、学内献血の実施に必要な条件を大学側に確認した上で、どうしたら「不可能を可能にできるか」を念頭に置き、学生たちと検討を重ねました。大学との調整の末、課外活動を担当する学生センターが実施および運営に責任を持つ形で、授業のない土日を通じて体育会の学生のみで実施することで決着。当日の会場の感染対策は日赤を信頼してお任せしましたが、前日までの感染リスクを減らす取り組みは体育会の体調管理・報告等の仕組みを使って徹底的に行いました。実施の結果は、当日のキャンセルもほとんどなく、大学の内外から想像以上の反響もあり、大学や学生にとって今後の財産になる貴重な活動ができたと思います。

東京都赤十字血液センター 山本貴子（やまもとたかこ）さん

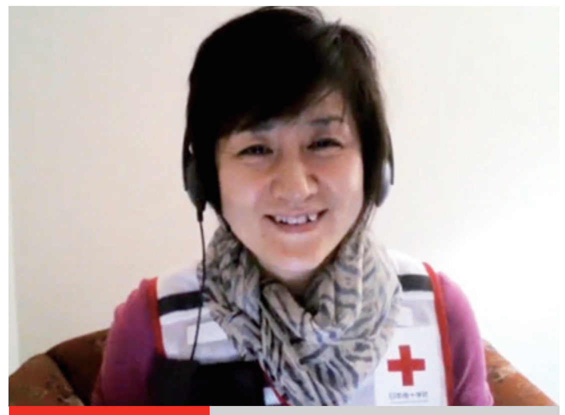


長南さんからインターネット経由で大学での集団献血の希望が告げられたのは、昨年の8月。その時は希望をかなえられませんでしたが、その後も学校・企業で例年行われていた団体献血の中止が相次ぎ、秋も深まる頃にいよいよ困り果て、彼らを思い出して声を掛けたところ、長南さんを含め上智大学サッカー部の方が10人も街頭献血に協力しに来てくださいました。しかも「もう少しお手伝いしたい」と言って、献血後には呼び込みのボランティアも。今年の 1月中旬、長南さんから大学で献血できるようになったと連絡を受けた時は本当に驚きました。私たちは、コロナ禍で大学が学生の登校も抑制している状況での献血実施は難しいと考えて、街頭やルームでの献血を何度も提案していたのです。数々の困難な条件をクリアして学生主導で実現するのはレアケースである上、3密回避の予約管理を学生たちが行って成功した事例なので、コロナ禍の大学生献血のモデルケースになると思います。今後も、さらに多くの学生に参加していただける環境づくりを学生ボランティアの皆さんと一緒に作り上げていきたいです。

TOPICS

第48回 フローレンス・ナイチンゲール記章の受章者発表
日赤の現役看護師が受章！

第48回では 18の国と地域から25人が受章。日本からは日本赤十字社医療センターの苫米地則子さん（現在、バングラデシュに派遣中）、ペシャワール会／PMSの藤田千代子さんが受章されました。1920年の第１回授与からの受章者総数は1543人にものぼり、日本からの受章者は世界最多の112人となります。



Interview from Bangladesh

苫米地 則子

青森県生まれ。日本赤十字社医療センター 看護師長（国際医療救援部）。1997年、スーダン紛争での国際救援活動に携わって以来、計16回の国際派遣を経験。2020年１月、世界からも注目を集めた「ダイヤモンド・プリンセス号」船内のコロナ対応では、看護師としての専門知識と数多の国際経験を遺憾なく発揮した。

受章記念インタビュー：苫米地（とまべち） 則子（のりこ）さん

from バングラデシュ

Q. まずは受章の感想をお願いします。

A. 受章は驚きました。赤十字の国際的な活動に数多く関われてきたことに加え、初期の新型コロナウイルス感染症の対応が注目されて今回の栄誉を頂いたのだと思いますが、いま、これまで普通にできていた「苦しんでいる人を救う」という活動がコロナ禍で制限される中、現役の看護師として使命を全うしなさい、という意味があるのかなと感じています。

Q. コロナ禍の初期、クルーズ船で救護班の総括調整員として活動し、どのようなことを考えましたか。

A. クルーズ船への派遣を任命された時、船の中は人種のるつぼで特殊な環境だと聞かされても、それに対するプレッシャーはありませんでした。これまでの海外救援と条件は近いので。それよりも、通常の海外派遣では事前に複数のワクチンを接種して備えるのに対し、未知のウイルスへの対応でワクチンもなく、その時点でできる感染対策を徹底することが唯一の備え。また、風評被害への懸念からそこで活動しているということを伏せなければならない、ということに通常と違う緊張感やストレスがありました。全国の病院から継続して医療チームを派遣することができ、なおかつ海外救援の経験が生かせる日赤は、このような特殊な医療支援でも、国や行政から期待されます。私たちはこの経験を生かして今後の備えの質をさらに高めていかねば、と思っています。

☆この続きは WEB で→

2010年 チリ大地震

マグニチュード 8.8 の大地震とそれに伴う広域な津波被害の救援活動を行うため、日赤医療チームの一員として派遣。入院病棟が全壊した公立パラル病院の機能回復を支援した。

2017·2018年 バングラデシュ南部避難民キャンプ

第１回目の派遣では医師、看護師、助産師などの専門家で構成された ERU※のヘッドナースを務めた。2回目の派遣ではチームリーダーとして全体を統括。心理社会的支援（こころのケア）や避難民の衛生上の行動変容も促進させた。

※Emergency Response Unit：緊急対応ユニット

2020年 新型コロナウイルス感染症

大型クルーズ船内における新型コロナウイルス感染症対応救護班の総括調整者の任を担った。未知のウイルスへの対応、多国籍の乗員乗客計 3711人が乗船という特異な環境下において、国際救援活動での経験を生かした。

※写真は医療センター内の新型コロナウイルス感染症対策本部で対応中のもの

わたしも赤十字 今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

寄付の協力者
豊田風佑（とよたふうすけ）さん
東京都江戸川区／37歳

人を助ける楽しさがあるから赤十字とのコラボは続きます

ゲーム業界を盛り上げようと、僕がｅスポーツ*の会社を設立したのは2011年４月。実は３月に設立の予定で進めていたのですが、東日本大震災が発生して延期しました。設立後、会社お披露目のゲームイベントを開催するにあたり、せっかくならチャリティーにしようとイベントの参加費を全て義援金として寄付しますと告知したら、みんなたくさん募金してくれて、70万円も集まりました。赤十字との付き合いはそのお金を全額寄付しに行ったのが始まりです。それを何度か繰り返すうちに赤十字の活動内容を詳しく伺う機会があり、東京都支部の方の誠実さにもほだされ（笑）、日赤を支援したいと思うように。今では千人ほど集まるチャリティーイベントを毎年開催し、その参加費やグッズの売り上げを赤十字に寄付するだけでなく、AEDや救急法講習、献血をイベントに取り入れて、その活動を楽しんでいます。

このチャリティーイベントは、参加する人、視聴する人たちが楽しむことが一番大切なことだと思っています。その中で支部の皆さんとコラボ CMを作ったり、赤十字の講習を受けたり、色々なことにチャレンジ出来ているのはとても嬉しいです。自分達のところまで降りてきて頂いて、アトラクションかのように参加者の方々も楽しみながら行えているのかなと。今後も楽しみながら、関わる人々が幸せになれるように、赤十字とのコラボをしていきたいと思います。

寄付するあなたも赤十字です

■クレジットカードで寄付
■郵便局・銀行の口座振替
■郵便局・銀行の窓口
■お近くの日本赤十字社窓口

＊ｅスポーツ：Electronic Sportsの略。対戦式のテレビゲームをスポーツ競技の一種と捉え、世界的な人気の高まりからオリンピックの新種目としても検討されている。

「フローレンス・ナイチンゲール記章」とは

第１回（1920年）受章者、萩原タケ女史に贈られたメダル

近代看護の礎を築いたフローレンス・ナイチンゲールの生誕100周年を記念して、1920年（大正９年）に創設されました。

このＦ・ナイチンゲール記章は「傷病者、障害者または紛争や災害の犠牲者に対して、偉大な勇気をもって献身的な活動をした者や、公衆衛生や看護教育の分野で顕著な活動あるいは創造的・先駆的貢献を果たした正規看護師や篤志看護補助者」に贈られるもの。第１回以来、隔年でＦ・ナイチンゲール生誕の日である５月12日に赤十字国際委員会（ICRC）から受章者が発表されています。

第一回受章者にメダルとともに贈られた章記

受章者紹介：藤田（ふじた） 千代子（ちよこ）さん

profile

鹿児島県生まれ、福岡県在住。ペシャワール会PMS支援室長兼PMS総院長補佐。

福岡徳州会病院在職中の1989年にペシャワール会創設者、故中村哲医師と出会い、1990年にパキスタン・イスラム共和国の北西辺境州（現、カイバル・パクトゥンクワ州）の州都ペシャワールのミッションホスピタルに赴任して以来、同医師が最も信頼し、最も多くの困難への対応を託された看護師として、同国やアフガニスタン・イスラム共和国等の支援活動に従事。

イスラム文化圏では、多くの女性が宗教上の理由から社会進出をためらい、医師や看護師などの専門職に就く女性も不足する中、現地言語に習熟し、自らの言葉で患者に説明できる専門家として活躍。ハンセン病などの皮膚疾患の早期発見・対応など、女性の健康対策の遅れについて、状況改善のため、PHC（Primary Health Care）※分野を担える現地の女性スタッフ育成にも尽力した。また、それらの活動により、同会のさまざまな活動が現地住民に深く根付いた。2009年には治安の悪化からやむを得ず帰国したが、育成した現地スタッフと緊密な連携を保って、人道支援活動を継続している。

※地域社会が主体となって、健康増進、病気の予防、治療、リハビリテーション、緩和ケアを含む社会全体のアプローチをする手法（引用：世界保健機関HP）

東大脳に挑戦！

知識を深める赤十字QUIZ

出題 東京大学クイズ研究会（TQC）

知ってるつもりでも、意外と知らない赤十字のこと。東大クイズ研が手掛ける問題にあなたは正解できる!?

日本赤十字社が行っている活動の中でも、街中などで目にする機会が多いのが献血。東京大学のキャンパスにも、献血車が来ているのを見たことがあります。多くの学生が協力していますよ。今月は身近な活動ともいえる「献血」をテーマに、その意外な秘密をクイズにしてみました。ちょっとだけ献血の知識を増やして、献血の際に思い出してみてください。

今月のクイズ 難易度：★★★

次の文章を読み、【 あ 】と【 い 】に入る言葉を答えてください。

ヒント
【あ】に入るのは「血管よりも先に注射針が触れてしまうところ」

献血を行う際、最初に出る血液は実際の輸血には使用されません。【 あ 】にいる【 い 】の混入を防ぐためです。事前の消毒だけでは、【 あ 】にいる【 い 】のすべてを消毒しきれないおそれがあります。

答えはP.6へ

AREA NEWS

全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

滋賀県 ワクチン接種会場で赤十字奉仕団がお手伝い

日赤滋賀県支部の赤十字奉仕団が新型コロナウイルスワクチンの接種会場でさまざまなお手伝いをしています。近江八幡市の奉仕団は、接種手順を確認するリハーサルに接種を受ける役で10人が参加、東近江市の奉仕団も、同じく接種リハーサルへの協力の他、市内4つの接種会場で毎日16人体制で交代しながら、5月10日から7月末まで受付補助や書類確認の業務を行います。

赤十字奉仕団として、行政のニーズをくんで自ら協力を申し出た

東大脳に挑戦！ クイズの答え

【 あ 】＝皮膚表面、【 い 】＝細菌

献血の針を刺した時、最初に出る血液(初流血)の25mLは輸血用には使用されず、検査に使われたり、保管して輸血による問題が発生した際の調査に用いたりしています。万が一問題が発生した場合、さかのぼって調査を行うことができるように、日赤では全献血者の血液の一部を11年間冷凍保存しています。この徹底ぶりは、世界でも類を見ないこと。未知の病原体への備えでもあります。

秋田県 活動の喜び、感動を伝えたい 赤十字活動川柳の募集に大反響

4月中旬、日赤秋田県支部で「赤十字活動川柳」の入賞作品発表がありました。これは昨年11月から3カ月間募集し、寄せられた172作品の中から選出されたもの。最優秀賞を受賞したのは潟上市赤十字奉仕団の小玉喜久子委員長の作品"「生きること」「救うこと」知る　救命法"。赤十字活動の輪が広がることを願う数々の秀作が、同支部のYouTubeなどで紹介されています。

最優秀賞賞品のハートラちゃん人形を受け取る小玉委員長(右)

岡山県 思いやる気持ちを育むために 子ども赤十字登録式を開催

日赤岡山県支部は、青少年赤十字に加盟しているこども園の「子ども赤十字登録式」に参加しました。式の中では「困っている人に手を差し伸べる」ことの大切さを知ってもらうため、ネパールの子どもたちの水くみの様子を話し、世界には大変な仕事を担う同じ年頃の子がたくさんいること、日赤が水道普及のための資金援助を行っていることなどを説明しました。

「わぁ、重い」。ネパールの子どもが使っている水がめを持つ園児

今年も世界中から届いた力作をラインアップ！「戦争と生きる力 プログラム supported by 赤十字」

SHORTSHORTS FILM FESTIVAL & ASIA 2021

米国アカデミー賞公認の国際短編映画祭「ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア」において、今年も「戦争と生きる力 プログラム supported by 赤十字」が上映されます。

今年のラインアップは、実話ベースのドラマやドキュメンタリーに加えて、アニメーションやコメディータッチの作品など。その中には赤十字国際委員会が制作し、国際的な賞を受賞した2作品「HOPE(希望～彼女の命を救えなかった理由)」「NO LIMITS(南スーダン車いすバスケットボールチーム)」も含まれています。

コロナ禍の今年も昨年同様、オンラインで配信されます。上映期間は6月11日(金)～30日(水)を予定。作品紹介と視聴方法については下記の二次元バーコードからアクセスしてください。

原爆投下から8カ月後の1946年、米軍の撮影班が戦後日本のドキュメンタリーを製作。19分のフィルム巻「11004」で暴かれる事実とは…

2013年当時のミャンマーを実話ベースで描く。子どもの兵士の兄妹が逃亡に失敗。12歳の妹は、兄を殺すか2人で死を待つか、究極の選択を迫られる

1930年代のドイツを舞台にした、実話に基づく物語。美術館で芸術家の作品がナチスに没収されるのを防ぐため、管理人が自らの命を危険にさらす

ニッポンの赤十字ゆかりの地を巡る 赤十字名所紀行 vol.3

長野県赤十字歴史資料館(長野市南県町)

明治後期の面影を今も残す貴重な資料館

平成20年4月1日に、日赤長野県支部に併設する形で開館した長野県赤十字歴史資料館。現存する日本赤十字社の支部事務所の中で最古といわれる建物です。建物の完成から100年以上が経過した「旧長野支部事務所・看護婦養成所」を取り壊す際に、「救護看護婦」を戦地へと送り出した「正面玄関」と「支部長室」を改修・保存。これらの建物の屋根瓦やガラス窓などを活用し、建設当時の姿をできる限り復元しています。

館内には、同支部が保存している、初代内閣総理大臣伊藤博文侯の書「十字赤章」(明治32年)や初代総裁小松宮彰仁親王の書「仁義」(明治34年)、赤十字の礎を築いた救護看護婦の遺品など、赤十字の歴史を語るうえで極めて貴重な資料の数々が展示され、先人の偉功を今に伝えています。開館から10年余り、毎年多くの方が訪れていましたが、コロナ禍により来館者数は激減。そんな中でも、案内ボランティアや館内清掃を行う長野県赤十字広報奉仕団などに協力してもらい、感染対策を施して、来館者をお待ちしています。

正面玄関を入ってすぐ伊藤博文の書が出迎える

千葉県 医療従事者への感謝も込めて… 病院前に空高く泳ぐ鯉のぼり

4月3日～5月8日、成田赤十字病院の敷地内に数百匹の鯉のぼりがお目見えしました。地元の「公津みらいまつり」開催に伴い、同イベント実行委員会から「子どもたちの成長と医療従事者の皆さんへの感謝の気持ちを表したい」というメッセージと共に提案があり、実現。正面玄関や駐車場などに掲げられた色とりどりの鯉のぼりが春の空を気持ちよさそうに泳いでいました。

色鮮やかな鯉のぼりに、患者さんや病院職員の気持ちも明るく！

岡山県 香川県 「赤十字の使命」を全うする 救護員研修を各地で開催

日本赤十字社は救護団体として各支部に医師・看護師・薬剤師・主事(ロジスティクス)で構成される救護班を常備し、コロナ禍においても災害時を想定した救護員研修を実施しています。岡山県支部では新年度に任命された救護員を交えて出動準備から救護所設営までの流れを確認。香川県支部では高松赤十字病院の看護師長らが講師となり災害診療の研修を行いました。

感染防止に配慮しながら、よりリアルな研修を実施(写真は岡山)

常任理事会開催報告

令和3年5月21日、令和3年度第2回の常任理事会が開催されました。

1　理事会に付議する事項について
(不動産の処分(芳賀赤十字病院))

審議の結果、理事会に付議する事項については、原案のとおり、理事会に付議することが了承されました。また、地域医療構想における個別案件、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対応状況、令和3年2月以降のミャンマーにおける赤十字の動き、葛飾赤十字産院の新築移転に伴う名称変更、第48回フローレンス・ナイチンゲール記章の選考結果、予算の補正にかかる社長専決事項等の決定状況について、それぞれ報告しました。

※オンラインによる開催となりました。

第98回代議員会開催公告

令和3年6月25日(金)、午後1時から新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」(東京都千代田区霞が関3丁目3番2号)において第98回代議員会を開催し、下記の事項を付議いたします。

但し、新型コロナウイルス感染の状況により、開催方法が変更される場合がございます。

令和3年6月1日

記

第1号議案　役員の選出について
第2号議案　令和2年度事業報告及び収支決算の承認について

全国 5月恒例の「赤十字運動月間」 コロナ禍の今年も啓発イベントでPR

日本赤十字社は毎年5月を「赤十字運動月間」とし、赤十字活動への理解を広める運動を全国各地で展開しています。コロナ禍の今年は各種のイベントが中止となりましたが、日赤各支部は慎重に感染対策を取りながら啓発活動を行いました。

新潟県支部は「世界赤十字デー」となる5月8日、県内初のレッドライトアップが新潟日報メディアシップで実施されることを契機に、青少年や赤十字ボランティアがチラシ入りのティッシュを街頭で配布。

徳島県支部では、第一次世界大戦時にドイツ兵捕虜と人道的な交流があった鳴門市北灘町櫛木地区で、地元ボランティアや住民有志らが赤十字活動への協力を呼び掛けるのぼりを設置。

香川県支部では毎年「赤十字フェスタ」を開催していますが、今年はコロナ禍を考慮して中止に。例年の参加型から形を変えて、4月25日に救護活動のパネルや救護車両を展示しました。会場では心肺蘇生やAEDの実演と、そのオンライン配信も併せて行いました。また、高知市赤十字奉仕団が高知市帯屋町の商店街に設置したのは、多数のハートラちゃんフラッグ。商店街の両脇に並んだハートラちゃんが行き交う人々の注目を集めていました。

昨年度から引き続きメディアを通じて赤十字活動をPRしたのは福岡県支部。福岡赤十字病院の医師や看護師、支部の職員が5月5日から4週にわたって九州朝日放送の「KBCラジオ　みんなで防災！」に出演。今年4月で5年が経過した熊本地震の救護活動についてそれぞれの経験を語りました。

感染対策をしたボランティアたちがティッシュの配布でPR

のぼりにはコロナ禍で活動する医療関係者へのエールも込められている

心肺蘇生の実演を興味津々の様子で見守る子どもたち

フラッグジャックは高知市赤十字奉仕団の発案

友尻茂樹救急科部長らが熊本地震の被災地の様子や救護活動を振り返った

「赤十字を応援！」プレゼント　パートナー企業紹介 vol.15　株式会社加島屋

新潟 加島屋

新潟の食文化を次世代へつなぐ活動を通して、地域に親しまれる老舗企業

昨年10月11日、新潟シティマラソンの代替大会に参加した加島屋の現社長、加島長八さん(写真左) と、社員の吉井俊郎さん(同右)

安政2年(1855年)創業の加島屋は、幕末から現在まで、時代を超えて「まごころのこもった手作りの味」を守り続けています。看板商品「さけ茶漬」はご飯のお供として半世紀以上の人気を誇り、全国に知られた銘品です。

新潟の歴史や伝統を大切にする加島屋は、コロナ禍の食支援として、県外に進学した新潟市出身の一人暮らしの学生を対象に「フードバンクにいがた」へ400缶の缶詰を寄贈。また、地元の小中学校の児童・生徒を工場見学や職場体験に招いたり、地域のマラソン大会には協賛するだけでなく社長や社員も走者として参加するなど、地域活性に積極的に取り組んでいます。先代の社長が県内最大の赤十字奉仕団の委員長として積極的に活動されてきた伝統を受け、今もなお活動資金への寄付や献血の協力を続けています。新潟の食文化を次世代へつなぎながら、先代の掲げた「地域の役に立ち、喜んでもらえるように、今できることを精いっぱいやる」という理念も、つないでいきます。

さけ茶漬 (中ビン・140g) 10名さまに

脂の乗ったキングサーモンを丁寧に焼き上げてほぐした逸品！

商品写真はイメージです

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前　②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢　⑤赤十字NEWS6月号を手にされた場所(例／献血ルーム)　⑥6月号に関するご意見・ご感想

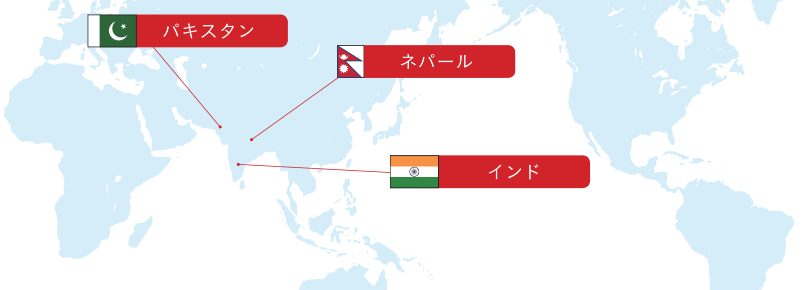
郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 6月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785　WEB応募／右の2次元バーコードからご応募ください。
6月30日(水)必着　※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

令和3年6月1日（毎月1日発行） 第973号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

WORLD NEWS

南アジアを襲うコロナ禍



©インド赤十字社

インドで最も被害の大きいマハラシュトラ州での救急搬送の様子。現地の赤十字病院もCOVID-19対応病院に指定されているが、医療物資の不足が深刻化しており、限界に近付いている

“感染爆発”のインド。現地赤十字社、不屈の闘い

インドとその周辺の南アジアで新型コロナウイルス感染症が猛威を奮っています。
パンデミックの渦中にある現地赤十字社と赤十字ボランティアの活動をリポートします。

医療崩壊の真っただ中にあるインドで総力戦で立ち向かうインド赤十字社

インドにおける新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者は、累計2200万人に達し、死者数も25万人を突破（2021年５月10日現在）。１日当たりの新規感染者数は40万人を超えたこともありましたが、これは世界の新規感染者数の半分にあたる数です。インド国内はこの突発的な感染爆発で、急速に病床や医薬品、治療用酸素などの物資不足に陥っており、医療崩壊が起きています。

こうした事態を受け、インド赤十字社は、政府の補助機関として、人びとの医療支援に総力を挙げて取り組んでいます。マハラシュトラ州にあるインド赤十字社が運営する病院では、COVID-19専用病床を開設し、同時に、ワクチン接種会場を設置して不眠不休の対応にあたっています。またインド赤十字社の550の支部は、地元行政と協力しながら、救急車での患者搬送支援、ワクチンキャンペーン支援、PCR検査実施、隔離施設の立ち上げ、マスクや衛生物資の配付と啓発活動などを進めています。インド全土で４万6000人以上の赤十字ボランティアがこの活動に従事しています。

インドと隣接する国々でも感染が急速に拡大中

インド周辺の南アジア各国でも感染拡大は予断を許さない状況です。インド北東の隣接国・ネパールはインドに続き数週間で感染者数が一気に増加。３月初旬の感染者数は１日当たり100人以下でしたが、５月現在は１日９千人以上の感染者が発生しており、死亡率も上昇しています。こうした中、ネパール赤十字社は、インドと国境を接する南部地域で入国時の検疫施設を設置し、スクリーニングの強化に貢献しているほか、105のワクチンセンターで赤十字ボランティアが検温や登録、情報提供などに従事しています。

またインドの北西に位置するパキスタンでは、４月に３週間に及ぶロックダウンが実施され、さらに５月からは、より厳格な封鎖措置となる「シャットダウン」が行われました。このため生活困窮者が急増しており、こうした事態を受け、パキスタン赤新月社は、人々への医療支援とともに緊急の食料支援等も展開しています。

また、南アジアに加えてカンボジア・ラオス・インドネシア等東南アジア諸国でも感染の拡大が懸念されています。国際赤十字・赤新月社連盟（以下、連盟）のアレクサンダー・マシュー アジア大洋州担当局長は次のように述べています。「COVID-19はアジアの広範囲で爆発的に流行し、病院や医療機関を圧迫しています。東南アジアでも、南アジアで起きているような感染拡大の兆しがみられます。私たちは今後数週間で事態がどう推移し、それにどう備えるのが最善かを考えなければなりません。今、私たちが必要としているのは、医療機器の増強、予防のための支援、ワクチンの供給などの地域的な支援とそのための世界的な連帯です」

連盟は、インドを含む南アジアの国々に対する支援を世界に向けて呼び掛け、現地の赤十字社・赤新月社と連携し、人道支援に取り組んでいます。

©ネパール赤十字社

ネパール・ラリトプル地区で、地元住民に対し感染予防の啓発活動を行う赤十字ボランティア

© COHEN, NADIA SHIRA/ICRC

supported by ICRC

赤十字、世界の「現場」から

赤十字国際委員会（ICRC）が展開する紛争地での保護活動や避難民支援。
その活動現場で切り取られた、知られざる世界の姿、世界の課題。

1998年２月、コソボ紛争勃発。セルビア軍の「民族浄化」から約25万人が着の身着のままで逃げ、極寒の森に隠れた。紛争終結から15年後、紛争の行方不明者を捜索するICRCは古い採石場に埋められた52人の遺体を発見。写真は男性の遺体と一緒に回収した歯ブラシと歯磨き粉。

1998年２月～1999年６月、旧ユーゴスラビアの一地域「コソボ」で起きた紛争では、セルビア軍とユーゴスラビア軍によるアルバニア系住人に対する「民族浄化」が続いた。村々は破壊され、レイプや虐殺が繰り返され、100万人が難民となった。あれから22年。ICRCは、今も安否が不明な1600人の追跡調査を継続している。